

一、次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。ただし、文中の言葉の下の「」の中はその言葉の意味とする。

「ここまでのあらずじ」

友人がした万引きの身代わりになったことから、都大会出場を辞退させられ、走哉そうやのいる学校に転校してきた一心いっしんは、心に傷を負ったまま生活している。秋の市大会で見た一心の走りが忘れられない走哉は、練習に明け暮れる日々を送っている。

① 部活の練習だけでは、飽あき足らない。もちろん、体はへとへとに疲つかれている。でも帰かえってから、休やすんでなどいられないのだ。体の奥底おくぞこからつきあげてくる何かが、おれに走れ、走れと言っている。

一心の疾走しこそうの美しさは、走哉にとって、素晴らしい音楽や絵画えがなど芸術の美しさにふれたときに似た、心の琴線きんせんをふるわすような美しさだった。

おれがどれだけ練習しても、あんな風には走れない。

いや、少すこしくらいは近づけるんじゃないか。

近づきたいんだ。

ぐつと空を見上げると、上弦じょうげんの月が雲の向こうに浮うかんでいた。

ちやうど月のまわりだけ、雲がぼっかり切り取られて、窓みたいになっている。すると、また風でうすい雲がたなびいて、月にレースのカーテンがかかったようになる。やがて、そのレースのカーテンがまた開いた。

しばらくのあいだ、走哉はその様子を見ていた。

「じゃ、ひらり先行つて。もう少ししたら、おれも帰るから」

「うん」

「暗いから、気を付けろよ」

ひらりが自転車のペダルに足をかけた。

「そうだ、お兄ちゃん、今日は他の人と練習してたの？」

「いや。なんで？」

「すぐそこで、公園の方からくる中学生くらいの男の人と、自転車ですれ違ったから。お兄ちゃんの友だちかと思った」

トクツと心臓が音を立てた。

「どんなやつだった？」

「んー。暗いし一瞬だったから、よく分かんなかった」

「そつか……。おい、ひらり早く帰れ。母さん心配するぞ」

ひらりは自転車をスタートさせた。

もしかして……。いや、そんなわけないか。

小さくなっていくひらりの自転車の反射板が、外灯にきらりと光った。

クールダウン「体を冷ます」のためにしばらく流したあと、走哉が帰り道をジョギングしているときだった。

暗闇にとけた住宅街のずっと向こうで、外灯の先に止まっている一台の自転車の影に気が付いた。こちらの様子をうかがっている。

走哉は目を細めた。目を凝らすと、さっきの予感的中したことが、すぐに分かった。胸がとくとく音を立て出した。

自転車との距離がどんどん縮まっていく。

走哉は少しペースを落とした。

自転車の影、正確には自転車から降りてその前に立っている人影は、微動だにせずこちを凝視している。

ふたりの距離は、もう五、六メートルとなり、走哉は走るのをやめた。歩きながら、距離を縮める。

どうした？ と走哉が声をかける前に、一心が口を開いた。

「お前さ、中長〔中・長距離走〕やってんだって？」

「ああ」

静まりかえった住宅街に、はき出される息の音が、コンスタント〔継続的〕に続いた。

⑤ 一心の視線が、走哉の頭の前から爪の先まで、なめるように這っていった。

「秋の市大会出た？」

⑥ 一心は、歌うような口調で言った。

「出た」

「千五百？ 三千？」

「千五百」

「タイムは？」

走哉は一瞬、言葉につまった。

「六分〇八」

「死んでんじゃん」

一心がつまらなそうにはき捨てた。

胸に言葉が刺さった。でも、表情は変わらなかった。

鋭利なナイフで切ったみたいに、傷は深いのにあまり痛みを感じないときのようなだった。

「お前にはさ、しよせん無理だよ。そんなに練習したって」

「……」

「そんだけ背が高いんだから、バスケとかバレーやった方が、まだマシじゃね？」

しばらく、沈黙が流れた。一心の頬がひきつれた。

「……かもな」

走哉の返事に、一心が目をむいた。

「だったら、やめろよ。そんな、カスみたいなタイムしか出せねえのに、やってる意味ないっしょ。おれならとっくにやめてるけど」

走哉がフツと笑った。

「なにがおかしいんだよ」

一心が眉間にしわを寄せた。

「ときどき思うよ。なんで、こんなこと始めちゃったんだろうって。走ることなんて最初からしなければ、こんなに苦しい思いもしなくてすんだのにつて」

「……」

「でも、やめられないんだ」

一心のひとみが一瞬揺れた。走哉は言葉を重ねた。

「やめたくないんだ」

走哉は一心の目をまつすぐ見返した。

「おれ、もう行くわ」

走哉は背筋をびんと張って、走り出した。

後ろを振り返らずに、走り続けた。しおれていきそうな心を支えるみたいに、ずっと背筋を張り続けた。

数週間が経った。

相変わらず、一心は部活に來なかった。

陸は、一心の「もう走るのをやめた」という言葉の重みを感じた。

やめた理由なんてもういい、と高畑先生には言ったけど、その理由が一心の心の中に深い傷を残しているような気がしてならない。辻くん、なにがあつたんだ……。

その心の傷を思うと、前のように積極的に声をかけるのも、かえってばかられた。

部員たちも、一心のことは言わなくなった。まるで一心など最初からいなかったかのように振る舞ってはいたが、内心気にしているのは、たがいに口にしなくても分かった。

ある朝のことだった。

陸が登校して、教室に向かうろうかの途中で、石井が前の方から向かってくるのが見えた。

石井は、だれも見えてませんというふうには、ロボットみたいに遠くに視線を固定したまま、足早に去って行く。ただ、教室に向かう生徒が圧倒的に多いので、流れに逆らう一匹の魚のように、がつんがつん人にぶつかっている。

それでもメガネの奥の細い目はずっと先を見ていて、^⑨かたくなに気付かないふりをしている。

「石井先輩！」

陸が目をまるくして声をかけると、石井は、はたためでもわかるほど大仰「おおげさ」に、肩をびくつかせた。

「びつくりした。陸か」

「おはようございます。先輩、どうしました？」

陸はうかがうように石井を見上げた。引つ込み思案の石井が、ほかの学年のろうかをわざわざひとりで通ることなど、ないような気がしたからだ。

「お、おはよう。いや、別に、うん」

石井は目をあちこちに泳がせた。陸が次の言葉を待っていると、

「あ、もう行かなきゃ。遅刻になる。じゃ、また部活で」

逃げるように行ってしまった。

陸は首をかしげながら、教室に入った。

いつものように、一心の後ろ姿を確認した。一心はまんなかあたりの窓際の席に腰かけていた。片手で頬づえをついて、外を眺めている。

外は灰色の雲がたちこめていた。グレー一色の背景をバックに背中を見せている一心は、まるで窓枠で切り取られた絵みたいだった。

その日の夕方、一心は自転車をあちこち乗り回し、夜の七時を回ると中央公園に向かった。

頭の中で、今朝、始業前にかわした石井との会話を反芻していた「思い返していた」。会話というよりは、一方的に話されたと言ったほうがいい。

「なんで、陸上部に来ない？ 陸から聞いたよ。辻は、走哉が（⑩）だと聞いて、まさか怖気づいたなんてこと……あつたりして。」

「はい？ あんな才能のかけらもないやつと、いっしょにしないでくれよ。」

「そうくると思ったよ。勝手なスイソクかも知れないけど、辻は今まで才能だけで、走ってきたんじゃないのか？」

石井はメガネのフレームを指先であげた。メガネの奥の線のように細い目が、まっすぐに一心に向けられた。

「それとも、才能あるがゆえに、才能に走らされてたとか？」

石井の言葉を思い出ただけで、そのとき感じた脳天に抜けるような痛撃を、今でもリアルに「はつきりと」感じた。

才能に走らされてた、だと？

なに言ってるやがる。

どういう意味なんだ。

才能あるがゆえに、無理やり走らされてたともいうのか。

怒りで頭皮がよじれる気がした。

でも、そのときは、小石がのどにつまったみたいに、ひとことも言い返せなかった。
絶句していたのだ。

石井は続けた。

——走哉には、辻にないものがある。いや、辻だけじゃなくて、陸上部のだれも走哉にはかなわないものがある。走哉を甘く見ないほうがいいぞ。

一心は、それがなんなのか聞きたかった。でも、口を開く前に、石井はくると背を向けると立ち去った。
中央公園が近づいてきた。

一心は、正面の入り口を素通りして、マンションのわきあたりに自転車をつけた。ここだと、万一、陸がベランダに姿を現しても死角になって見えないはずだ。金網ごしにグラウンドを凝視した。

思った通り、走哉は走っていた。

くたびれた雑巾みたいに疲弊しているのが、一目瞭然だった。その姿は、一心を無性にいらつかせた。
なんで、あんなやつがおれのライバルなんだ。

あいつにあつておれにないもの、そんなものがあるわけがない。

ふざけるな。

金網を握る手に力がこもった。手に五本の筋がくつきり浮いた。

走哉は、よたつきながらもなお走り続けている。長身の体が、たよりなく左右にぶれだした。
なんであんなに遅いくせに、走り続けるんだ。

いや……。

なんであんなに走れるんだ。

そのとき一心は、体の奥に、疼きのような、燻りのようなものを感じた。

⑫ 消えたと思っていた炭の炎。でも、実は消えずに残っていた、オレンジ色をした点のような光。

——たしかに、なにかが燻ぶり始めた。

何周か走り終えたのか、走哉は両手をひざにあてて、腰を折った。

すると、少ししてふらふらよろけるように、地面に倒れこんだ。えびのような形のまま動かない。

ハツとして、一心は金網すれすれまでぐつと顔を近づけた。

あいつ、だいじょうぶなのか？

⑬ 胸がとくとく高鳴ってきた。

かけよるべきか。でも……。

しばらく待った。まだ走哉は動かない。

まずい。危険な状態なのかも知れない。

一心は自転車にまたがると、正面の入口に全速力で回った。入口を突っ切って、がむしやらにこいだ。走哉が倒れこんでいるところに自転車をつけると、ブレーキがギツとはでな音を立てた。

「おい、だいじょうぶか！」

走哉は寝ころんだまま、首をよじった。目を細める。

「つ、じ？ どうしてここに？」

「それより、だいじょうぶなのか？」

走哉がちゃんと口をきいた時点で、ほぼ安心はしていたのだが、^⑭「一心は怒ったような声をあげた。」
「う、うん。なんか急にぐらつときて」

「貧血じゃないか？」

「貧血？」

走哉が体を起こそうとすると、一心は手でそれを制した。

「もう少し、休んでた方がいい。お前、練習しすぎなんじゃないのか。ちゃんと休息は取っているのか」

「……」

「トレーニングで破壊^{はかい}された筋肉が、超回復^{ちようふく}が起こる前に次のトレーニングを行うと、筋肉は増強されるところか、破壊され続けるんだぞ」

「破壊？ 超回復？」

「何にも知らねえんだな」

一心は、あきれたように鼻から息をはいた。

「トレーニングで、筋肉は破壊されていったん落ちるけど、^⑮テキドに休むことで超回復っていうのが起きて、落ちたはずの筋肉が、トレーニング前の筋肉より大きくなるんだ。うまく休息を取らないと、トレーニングをやり続けたって逆効果ってことだ」

「そうなんだ」

走哉はひじで上半身を支えながら、ゆつくりと体を起こした。

「そんなことも知らねえで、いったいどんなメニューで練習してんだよ」

「たつかんファイル」

「たつかん？」

「前の顧問で、高畑先生^{こもん}っていう先生がいて——」

「ああ、まえ部長のなんとかが言ってた、すごい先生ってやつか」

一心は走哉の言葉を、小馬鹿^{こばか}にしたようにさえぎった。

走哉はゆつくり立ち上がった。

「千五百でさ、きっかり二分も差があるんだよ」

唐突^{とうとつ}な走哉の言葉に、一心は戸惑^{とまど}うように目を細めた。

「すごいな……やっぱり、すごいよ」

走哉の口から、ひとりごとみたいに言葉がもれた。

「……」

一心の動きが止まった。

^⑯「こいつ、あれだけおれに無茶苦茶けなされて、それでよく……」

「もう、だいじょうぶだから。帰るわ。ありがと」

走哉は、体に付いた土ぼこりを簡単にはらうと、公園の出口に向かった。

「おい、まだ走るなよ。歩いて帰れ」

一心が走哉の背中に声をかけると、走哉は振り返らずに片手を上げた。

(佐藤いつ子「駅伝ランナー2」より 一部表記・体裁を改めた)

問一、——①「体の奥底からつきあげてくる何か」を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、文中の言葉を使って十五字以内で答えなさい。

□ という思い

問二、——③「さっきの予感」を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、考えて十字以内で答えなさい。

もしかしたら □ は一心ではないか、ということ

問三、——④「胸がとくとく音を立て出した」・⑬「胸がとくとく高鳴ってきた」とありますが、この時の走哉と一心の心の状態としてみてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 苦悩 イ 緊張 ウ 期待 エ 安心

問四、——⑤「一心の視線が、走哉の頭の先から爪の先まで、なめるように這っていった」とありますが、この時の一心の様子の説明としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 走哉の実力をおし量っている イ 走哉の性格を想像している
ウ 走哉の呼吸の速さを量っている エ 走哉の心臓の音を聴いている

問五、——⑦「しおれていきそうな心」の説明としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ばかりにして、自分の背中を見送っている一心がにくらしいということ

イ 強がってみせるために、一心にうそをついたことがはずかしいということ

ウ 一心の言葉が胸を刺し、やる気がなくなってしまうそうだということ

エ なんとか一心のような疾走ができるまでやっばり続けてみようということ

問六、——⑨「かたくなに気付かないふりをしている」とありますが、この理由としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 心に傷を残し走るのをやめた一心に部活に出るよう誘うのははばかれるので、他の陸上部員に会いたくないから

イ 引っ込み思案の自分が陸にたのまれて決心したことなので、これからやろうとしていることで頭がいっぱいだから

ウ 陸上部員はみんな一心のことをもう気にかけていないので、自分だけが一心に気をつかわなければならないのがつらいから

エ 遅刻しそうになって、他の学年のろうかで人とぶつかりあせっているの、後輩の陸上部員に声をかけられたくないから

問七、(⑩) にあてはまる言葉を、()より後から四字で抜き出して答えなさい。

問八、——⑫「消えたと思っていた炭の炎」を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、考えて漢字二字で答えなさい。

走ることへの □

問九、——⑭「一心は怒ったような声をあげた」とありますが、このときの一心の気持ちとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分勝手なメニューで練習している走哉に対していらだちを感じている

イ 走哉を助けに来たのにまったく相手にしてくれないので不満を持っている

ウ まったく効果のない厳しいトレーニングを続ける走哉にあきれている

エ 一人で無理な練習をして倒れてしまった走哉の状態について心配している

問十、——⑯「こいつ、あれだけおれに無茶苦茶けなされて、それでよく……」とありますが、この後続く言葉としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 高畑先生のメニューで練習してるよな

イ 貧血で倒れるまで走り続けられるよな

ウ おれのことを「すごい」なんて言うよな

エ 千五百メートルに出場しようと思うよな

問十一、——②「絵画」・⑥「口調」・⑧「逆らう」の漢字の読みを答え、⑪「スイソク」・⑮「テキド」のカタカナを漢字に直しなさい。

二、次の読書について書かれたⅠ・Ⅱの文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。ただし、文中の言葉の下の「」の中はその言葉の意味とする。

《Ⅰ》

本を選ぶ際の参考として、ベストセラー情報を挙げる人がいます。書店でのタンジュー^①な売上げ上位本だけではなく、最近では「二十代女性のベストセラー」とか「料理本のベストセラー」など、いろいろな切り口で本の順位付けが行われています。

しかし、私は、ベストセラー情報で本を選ぶことはほとんどありません。ベストセラー情報は、言ってみればラーメン屋さんの行列のようなものです。ラーメン屋さんでは、最初にたまたま行列ができたら、人がそれに釣られて並んでさらに行列が長くなる、ということがよくあります。ベストセラー情報はそれと同じで、必ずしも内容のクオリティをハンエイ^②したものは限りません。現在「よく売れている」「みんなが読んでいる」という、たんなる「量」の情報にすぎないのです。

本の情報としてはほかに書評があります。こちらは大いに活用しています。機会あることに言っているのですが、とくに新聞の書評欄は、新聞のなかでもっともクオリティの高いページだと思っています。書評はそれぞれの分野の専門家が、署名入りで執筆^{しつぱつ}しています。アホなことを書いたら同業者から笑われてしまいますから、けっこう一所懸命書いているのではないのでしょうか。専門分野の著名記事は、おのずとインセンティブ「目標を達成するための刺激」^{しげき}が働き、クオリティが高くなるのです。

実際、新聞の書評で興味を掻き立てられた本は、ほぼ例外なく面白い。現在は仕事^{いそが}が忙しくて書店に行く時間がなかなかとれないので、私の本探しの七、八割は、新聞の書評に頼^{たよ}っています。書評は本のコンテンツ「内容」について書かれています。この本はこういう内容で、ここが面白いといった具合^③です。つまり、「（④）」の指針になっているのです。ベストセラー情報が「量」の情報であるのと対照的です。

ベストセラー情報に頼らないのは、私の読書の志向がほかの人とは違うという理由もあります。多くの人に人気がある本と、私が好きな本とはかなり異なるのです。ですから私がベストセラー情報を頼りにしても、満足のいく結果が出るとは思えません。

本の好みは十人（⑤）です。どの俳優が好きか、人によって違うのと同じことです。ですから、ベストセラー情報を知っていることより、自分はどのような俳優が好きなのかを自覚するほうが本当は大事なはずですよ。

新聞の書評欄について付け加えれば、大変バランスよく本をチョイス「選択」しているという点でも評価できます。文系の本もあれば理系の本もある。日本に限らず、海外の優れた本も紹介されます。新聞の書評に沿って本を選んでいけば、ほぼ自動的に、フランスのよくとれた読書ができるでしょう。いわば、栄養士がちゃんと調整してくれる食事のようなものです。新聞の書評を指針として読書をしていくのは、一つの優れた方法だと思います。

当たり前のことですが、同じ読むなら優れた本のほうがいいと思います。スキーを教えてもらうとき、厳しいけれど優れたプロに教えてもらうのと、やさしいけれど下手な友人に教えてもらうのでは、上達の度合いがまったく違います。それと同じです。

では、優れた本とはどういうものでしょうか。保守主義の立場から言えば、まず、古典は無条件に優れていると言えます。何十年も何百年も、無数の人々の眼力に耐え、市場で生き残ってきたものは、いいに決まっています。

百年以上生き残ってきたものは、まず間違いがありません。どのような理由で生き残ることができたのかは個々の事情があるでしょうが、時代が変わっても価値が認められてきたわけですから、九九%クオリティの高いものと考えていいと思います。

人智・年月の淘汰「選択」に耐えて生き残ったものの、人類の経験知の集積として評価されているものが古典です。さしあたって読む本が見つからない場合は、まず古典を読むことをおすすめします。⑦ 古典の定義はいろいろありますが、「岩波文庫や東洋文庫に入っている本」と考えておけば、まず間違いありません。古典は優れたプロのコーチです。慣れるまでが大変ですが、確実に賢くな

ることはプロのスキーコーチに教わる場合と同じです。

《Ⅱ》

なぜ本を読むのか、そして本の魅力についてあらゆる角度から自分なりに考えてみたいと思います。⑧

僕が本を読んでいて、おもしろいなあ、この瞬間だなあと思うのは、普段からなんとなく感じている細かい感覚や自分の中で曖昧模糊としていた「はつきりしない」感情を、文章で的確に表現された時です。自分の感覚の確認。つまり共感です。

わかっていることをわかっている言葉で書かれていても、あまり共感はありません。言葉にできないであろう複雑な感情が明確に描写された時、「うわ、これだ！」と思うんです。正確には「これだったんだ」と思っているのかもしれませんが。自分の心の中で散らかっていた感情を整理できる。複雑でどうしようもなかった感情や感覚を、形の合う言葉という箱に一旦しまうことができるのです。⑨

お笑いにも「あるある」という共感の笑いです。あるあるは文学の共感とは違い安堵感の笑いですが、あるあるでウケるネタも誰もがわかっていることではなく、「そういえばそうだ」とか「そうかもしれない」というポイントです。僕が本を読んで共感できるところも、まったく同じ経験をしたわけではないけれど、「あの時の自分の感覚と近い」というものが多いんです。

芥川龍之介の『トロッコ』を読んだ時も状況は違いのにかつて似たような恐怖を自分も感じたことを思い出しました。太宰治の『人間失格』を読んだ時も共感する部分が多かった。本を読むことによって感覚を確認できるんです。

本を読んで一番好きなのがこの感覚の確認——共感の部分です。それに加えて本の魅力のもうひとつに感覚の発見というものがあると思います。本を読むことによって、これまで自分が持っていなかった新しい感覚が発見できることです。

例えば中高生の頃、本の中で不倫がテーマとして描かれていたら、もちろん自分には経験がないけれど、主人公がどんな判断、言動をするのか、それを知ることとも感覚の発見のひとつです。もしくは、自分が経験でき得る状況にあることが描かれている場合でも、

「え、そこでそうするんだ」「なるほど、その手があったか」というのも感覚の発見だと思います。つまり、ある種の裏切りであり、それにより衝撃は一層大きなものになります。

『火花』（筆者の作品）の中で「共感至上主義の奴達って気持ち悪いやん？」と書きました。本の話題になると、「私は共感できなかった」という人がけっこういます。いや、あなたの世界が完成形であって、そこからはみ出したものは全部許せないというそのスタンス（態度）ってなんだろうと思うんです。あなたも僕も途上だし、未完成の人間でしょう。それをなぜ「共感できない」というキーワード（決めつけた言葉）で決めつけてしまうのか。「共感できない」という言葉でその作品を規定しない方がいいと思うんです。むしろわからないことの方が、自分の幅を広げる可能性があります。

それに加えて、主人公の人格がすごく重要視されることが多いように思います。主人公がちゃんとした人間でないといけない、おかしいやつは許さないという。小説の主人公自体も世の中の共感至上主義に侵されなければならないのでしょうか。

自分の感覚にはまるものもおもしろい、それ以外はおもしろくないというように読んでいくと、読書本来のおもしろさは半減してしまうと思います。読書のおもしろいところは、主人公が自分とは違う選択を経験できることや、今まで自分が信じて疑わなかったようなことが、本の中で批判されたり否定されたりすることにあると思います。

言い換えれば読書によって今までなかった視点が自分の中に増えるということです。本に書かれていることがすべて正しいわけではないので、否定された自分の考えがなぜ否定されたのか、どのように否定されたのかを知り、それについて自分で考えを改めたり、いやそれは違うと反論したりすることによってさらに視点は増えていきます。

アルベール・カミュというフランスの小説家の『異邦人』という作品があります。主人公は「太陽がまぶしかったから」と言ってお人を殺します。そんなもの、実世界において了解できるわけがありません。でも、「どういことなんだろう」とか「そんなものな

のかな」とか「そういうこともあるかもな」と思いながら読み、考えるわけです。殺人に共感する必要はないけど、考える。その上で主人公の気持ちに何か自分にも当てはまる部分があるかもしれない。ないかもしれない。本を読みながら主人公が置かれている状況やシンキョウを想像してみる。それは自分にもうひとつの視点を持たせてくれることになるし、思考の幅を広げることになります。

人間は完全ではありません。完全でありすぎるとしんどいかもしれません。自分に自信を持つことはいいことですが、自分がわからないものを否定し遠ざけ、理解できること、好きなことだけに囲まれることは危険です。わからないものを否定して拒絶を続けるなら、その先は争いしか生まれないと思います。自分と考えの違う人間や文化をも拒絶することになってしまう。それは本当につまらないことだと思うんです。すべてに共感するのではなく、わからないことを拒絶するのではなく、わからないものを一旦受け入れて自分なりに考えてみる。

本を読んで共感するということは、間違いなく読書の中で重要で面白い部分です。でもそれが本のおもしろさの半分。残りの半分は新しい感覚の発見だと思います。

家事で言うと、共感に感覚を整理する便利な箱のような役割があるのだとしたら、発見には新しい電化製品を購入した時のような快感があります。家事が楽になると嬉しいですよ。読書で得た発見によって思考速度が上がることは珍しいことではありません。僕やみなさんが普段使っている道徳や考え方というのは現代の世の中に普及しているシェア率（わりあい）ナンバーワンの洗濯機にすぎないのかもしれませんが。みんな使っているし、説明書を読まなくてもだいたいわかるし、なじみもあるしということに溺れているだけかもしれません。新型でもっと性能の優れた洗濯機があるかもしれない。部分汚れを落とすなら過去に主流だった手洗の方が強いかもしれない。何が正しいかなんて実際に検証してみないとわかりません。「私には共感できませんでした」は、シェア率ナンバーワンの商品を使っている人達の「絶対にこれが一番良いに決まっている」と似ています。それですべての汚れが落ちるとは

限りません。

感覚の確認と発見の両方があり、それがせめぎ合っている本が僕は好きです。読者である僕達がそれを意識して楽しもうと思うことによつて、読書はさらにおもしろいものになってゆくと思います。

《I》(出口治明「人生を面白くする本物の教養」より 一部表記・体裁を改めた)

《II》(又吉直樹「夜を乗り越える」より 一部表記・体裁を改めた)

問二、(④)にあてはまる言葉を、考えて漢字一字で答えなさい。

問二、(⑤)にあてはまる言葉を、考えて漢字二字で答えなさい。

問三、——⑦「まず古典を読むことをおすすめします」とありますが、この理由としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 古典は読むのも簡単であり、どんな人にもとつきやすく書かれているものが多いから

イ 古典は長い年月の間に進化してきたものであり、誰にとっても役に立つものだから

ウ 古典は人類の知恵が集まっているものであり、長い年月、評価され続けているものだから

エ 古典は人間の知恵の宝庫であり、これからも守っていかなければならないものだから

問四、——⑧「本の魅力」とありますが、筆者は読書をよりおもしろくするために、どのようなことを意識するべきだと言っていますか。文中から十一字で抜き出して答えなさい。

問五、——⑨「形の合う言葉という箱に一旦しまうことができる」とはどういうことですか。もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の中ではつきりしない感覚や感情に言葉が与えられ、整理できるということ

イ 普段から感じている細かい感覚や感情に魅力が与えられ、整理できるということ

ウ 言葉にできない複雑な感覚や感情に安堵感が与えられ、整理できるということ

エ 心の中で散らかっていた感覚や感情に共感が与えられ、整理できるということ

問六、——⑩「芥川龍之介」の作品として**ふさわしくないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 杜子春 とししゅん イ 坊っちゃん ぼ ウ 蜘蛛の糸 くも エ 鼻

問七、——⑫「すべてに共感するのではなく、わからないことを拒絶するのではなく、わからないものを一旦受け入れて自分なりに考えてみる」とありますが、これをするによつてどのような結果が得られると言っていますか。それが書かれている一文を文中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問八、——⑬「それ」の具体的な内容を、文中から十三字で抜き出して答えなさい。

問九、——⑭「すべての汚れが落ちる」とはどういうことですか。もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間や文化のすべての問題が解決できるということ

イ 世の中にあるすべての問題が解決できるということ

ウ 道徳や考え方のすべての問題が理解できるということ

エ 作品の中のすべての問題が理解できるということ

問十、ⅠとⅡの内容としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 新聞の書評は、署名なしでも執筆者は一所懸命に書いている

イ 自分がどの本を好きかより、どの本が人気があるかが重要である

ウ ベストセラー情報であげられていても優れている本は多数ある

エ 小説の主人公に共感できないという読書の仕方はおもしろくない

問十一、――①「タンジュン」・②「ハンエイ」・③「シンキョウ」のカタカナを漢字に直し、④「具合」・⑤「沿って」の読みを答えなさい。

受験番号	
	氏名